

十三束第2遺跡(第2次調査) 築池遺跡(第5地点)

2005年3月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

この報告書は、緊急地方道路整備事業上水流7号線・下水流17号線道路改良工事に伴い、都城市教育委員会が実施した、都城市上水流町に所在する十三束第2遺跡の第2次調査と、下水流町に所在する築池遺跡の第5地点の発掘調査報告書です。

平成15年の6月から10月にかけて実施した発掘調査の結果、主に縄文時代から弥生時代、古代の遺構・遺物が発見されました。

本書は、これらの文化財を記録として後世に伝えることを目的として作成しました。本書が、郷土の歴史を理解するための資料として活用されることを願っています。

最後に、発掘作業に従事していただいた作業員の皆様をはじめ、現場における調査や出土品の整理作業から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、多くの先生方に心より厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

都城市教育委員会

教育長 北村秀秋

じゅうさんづか
十三束第2遺跡
(第2次調査)

例　　言

- 1 本書は緊急地方道路整備事業上水流7号線道路改良工事に伴い、平成15年度に実施した十三束第2遺跡(第2次調査)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は都城市教育委員会事務局が主体となり、同市文化課主事久松亮が担当した。
- 3 遺構実測図の作成は、作業員の協力を得て久松が行い、すべての製図は久松が行った。また、遺構分布図の作成及び遺物の取上げにはテクノ・システム株式会社の遺跡調査システム“S I T E”を使用した。また、遺構実測図の一部と地形測量を有限会社ジバングサーベイに委託した。
- 4 本書に用いた方位は、座標北であり、レベルは海拔絶対高である。
- 5 本書に掲載した遺物実測図の作成は伊鹿倉康子・奥登根子・水光弘子・谷口和代が行い、製図は久松が行った。
- 6 遺構・遺物の写真撮影は作業員の助力を得て、久松が行った。
- 7 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
- 8 本書に用いた略記号は次の通りである。
SC - 土坑 SD - 溝状遺構 SK - 道路状遺構
- 9 出土遺物・写真・図面記録等は、都城市役所菖蒲原別館および都城市文化財収蔵庫に保管されている。

本文目次

第1章 はじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 調査の記録	
1 調査の概要	3
2 A区の調査	5
3 B区の調査	7
4 C区の調査	7
5 D区の調査	9
6 E区の調査	10
第4章 おわりに	20

表 目 次

表1 B区出土遺物観察表	7
表2 C区出土遺物観察表	9
表3 D区出土遺物観察表	10
表4 E区出土遺物観察表(縄文)	17
表5 E区出土遺物観察表(弥生・平安・石器)	19

図版目次

図版1 調査区全景、各区土層断面	21
図版2 調査風景、A区、B区	22
図版3 C区、D区	23
図版4 D区、E区	24
図版5 E区	25
図版6 揭載遺物	26

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	基本土層図	3
第3図	調査区域図	3
第4図	A区遺構分布図及び土層断面図	4
第5図	SK 01・02・03 実測図	5
第6図	B区遺構分布図及び土層断面図	6
第7図	B区出土遺物実測図	7
第8図	C区遺構分布図及び土層断面図、SC 01 実測図	8
第9図	C区出土遺物実測図	9
第10図	SC 08 実測図	9
第11図	D区出土遺物実測図	10
第12図	D区・E区・F区遺構分布図	11・12
第13図	E区土層断面図	13・14
第14図	SC 03・04・05・06、SD 01 実測図	15
第15図	E区出土遺物実測図(縄文)	16
第16図	E区出土遺物実測図(弥生・平安・石器)	18

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成14年7月5日、「リサイクルプラザ施設に伴う道路拡幅工事」に伴う埋蔵文化財の有無の照会が、都城市土木課より同市教育委員会になされた。当該開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地、築池遺跡と十三東第2遺跡の範囲内にあたるため、同市文化課は築池遺跡については平成14年9月10日～30日、十三東第2遺跡については平成14年10月7日～9日にかけて確認調査を実施した。

築池遺跡は、トレーニングによる調査では開発予定地西側のトレーニングで中世以前の道路状遺構が確認できた以外は遺構・遺物とも確認できなかったが、遺構検出面となる御池降下軽石層や遺物包含層となる黒色粘質シルト層まで、現道下を含めて良好な状態で遺存していることが確認できた。また、今開発予定地周辺に多数分布していると推測される地下式横穴墓は、トレーニングによる確認が困難であることから、地下レーダー探査法を用いた調査も実施している。その結果、開発予定地東側において強い空洞反応が確認されていることから、東半分を中心に約40基ほどの地下式横穴墓が遺存していることが推定された。

十三東第2遺跡は、トレーニングによる調査で開発予定地北側に設定したトレーニングを除く、ほぼすべてのトレーニングで縄文・弥生土器片、近世陶磁器が出土した。また一部のトレーニングでゴボウ作付けの際に攪乱の痕跡が認められたが、遺構検出面となる御池降下軽石層、遺物包含層となる黒色粘質シルト層や黄褐色粘質シルト層(この違いは御池軽石降下後の植生の違いによる)が現道下を除いて、ほぼ良好な状態で遺存しており、遺構も道路状遺構1条、溝状遺構1条、土坑1基が確認された。

この結果を受けて、両課で文化財の保護策について協議を行った結果、平成15年度に発掘調査を実施、平成16年度に報告書を刊行することとなった。

2 調査体制

築池遺跡(第5地点)、十三東第2遺跡(第2次調査)の発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体 都城市教育委員会

調査責任者 教育長 北村 秀秋

調査事務局 文化課(平成16年度より文化財課)

課長 井尻 賢治(平成15年度) 稲丸 满文(平成16年度)

課長補佐 坂元 昭夫

副主幹 矢部喜多夫

調査担当者 十三東第2遺跡 主事 久松 亮

築池遺跡 副主幹 矢部喜多夫

発掘作業員 岩切數秋 岩切ユキ 岩本 泉 内村好子 櫻ツネ 櫻ハナ 小山田福子 蒲生ミツ子

河野春信 椎谷松子 城村ミサ 庄屋幸子 澄之口キミ子 竹中美代子 立山君子

津曲節子 寺田庸平 徳丸ヒサ子 中原貞良 中原忠珍 平山甲子郎 藤田フヂ子

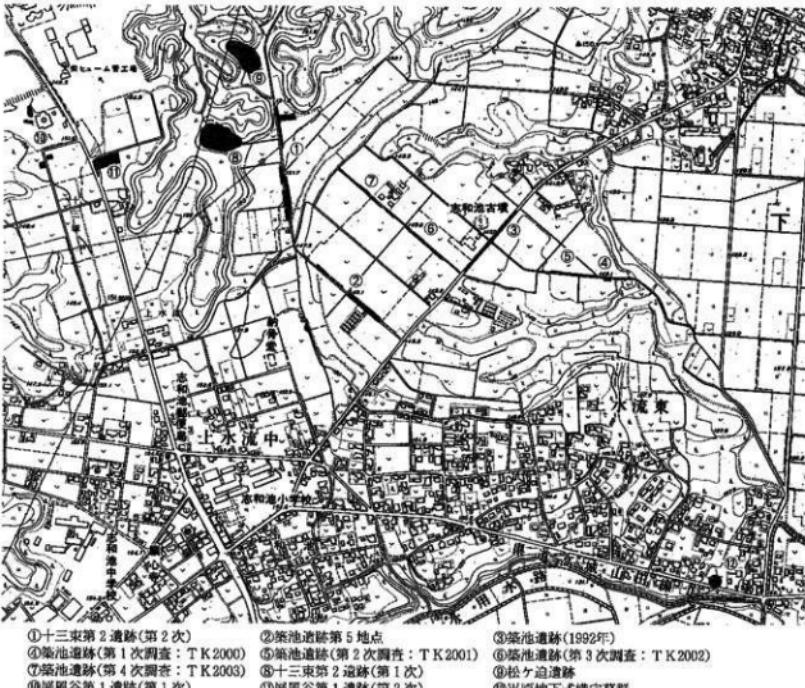
二山邦夫 二見義彦 坊地トミ 馬籠恵子 南スミ子 山口一夫 山元勝

整理作業員 伊鹿倉康子 奥登根子 小浜ひろ子 水光弘子 谷口和子 福岡八重子 丸崎千鶴子

第2章 遺跡の位置と環境

十三束第2遺跡の第2次調査地点と築池遺跡第5地点はそれぞれ、都城市の北東部、上水流町と下水流町に所在し、東には大淀川氾濫原の水田が広がっている。この付近一帯は、志和池古墳群や、築池地下式横穴墓の分布する古墳時代の墓域として知られている。地下式横穴墓は農作業中の陥没によって発見される場合が多く、調査は昭和48年に初めて発掘調査が行われて以来、平成15年までに計15基の地下式横穴墓がこのように発見され調査されている。その他、面的な調査としては、平成4年に遺跡中央を走る県道の拡幅工事の際に20基が確認され調査されているほか、平成12年から15年にかけて、農道拡幅工事に伴う発掘調査(築池遺跡第1次調査～第4次調査)で計20基の地下式横穴墓が確認されている。また昭和44年には、今回の調査区の南東約1kmで平原地下式横穴墓群も発見・調査されている。

平成7年に実施した十三束第2遺跡の第1次調査では、縄文後期と弥生中期の遺構遺物が出土している。その直ぐ北で同時期に調査された松ヶ迫遺跡では、塞ノ神式等の縄文早期の土器と同時期の集石遺構や炉穴等が確認されている。近隣の遺跡は他に、今回の調査区の西を南北に走る国道221号線沿いの屏風谷第1遺跡がある。平成3年に実施した第1次調査では縄文早期の押型文土器が出土したほか、縄文時代晚期と弥生時代の遺物も出土している。平成8年に実施した第2次調査では縄文時代晚期と弥生時代後期から古墳時代初頭頃の遺構・遺物が確認されている。



第1図 遺跡位置図 (S=1/10000)

第3章 調査の記録

1 調査の概要

十三東第2遺跡の発掘調査は平成15年6月10日から9月10日にかけて実施した。ただし6月は降雨が非常に多く、6月10日に調査事務所と用具倉庫を兼ねたプレハブを設置した後、実際に重機による表土剥ぎを開始したのは6月25日となった。調査は道路拡幅部分のみ実施した。調査区は現道と電柱によって5つの区画に分けられるため、それぞれA区～E区と呼称した。なお同時期に北諸県農林振興局の農道整備事業に伴う発掘調査も実施されている。この調査も当調査と同様に都城市教育委員会事務局が主体となって実施し、当調査と同じく久松亮が担当した。E区の東側に隣接するこの調査区はF区と呼称した。

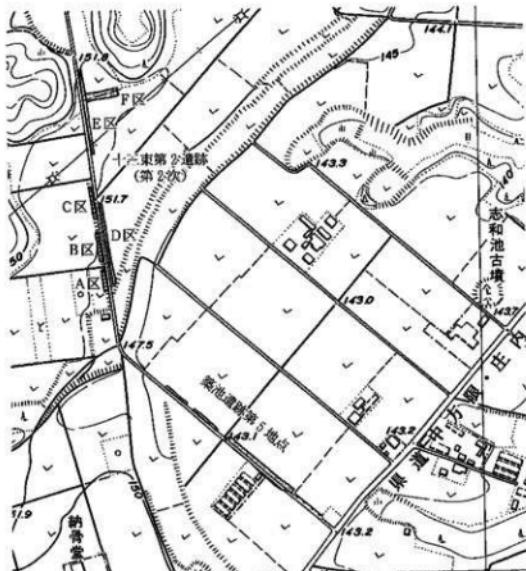
調査は重機にて表土を剥いた後、遺物包含層を人力にて掘り下げ、御池降下軽石層上で遺構の検出を行った。表土剥ぎの結果、B区はほぼ全域にわたって、ゴボウの作付けに伴う破壊を受けていた。また、D区も現地表面から遺構検出面までが予想外に浅く、中央部は御池降下軽石層上部が耕作による破壊を受けていたため、調査区から除外し廃土置き場とした。なお、南北に長いE区の北端と南端の調査区外の開発予定地を深く掘り下げ、廃土置き場とした。

遺跡の基本土層は、現耕作土とその下の旧耕作土の下に遺物包含層となる黒色土層・御池降下軽石層への漸移層・御池降下軽石層(霧島山系御池火口起源の軽石、約400年前に噴出)と続くが、E区の北側では、現耕作土の下が薄い黒色土層を挟んで黄褐色土層となり、漸移層・御池降下軽石層となる。これらの違いは御池軽石降下後の植生の違いによるものと考えられ、黒色土層の観察できる地点ではイネ科植物を中心とする草原で、黄褐色土層の観察できる地点はクスノキ等の照葉樹林であったと考えられる。

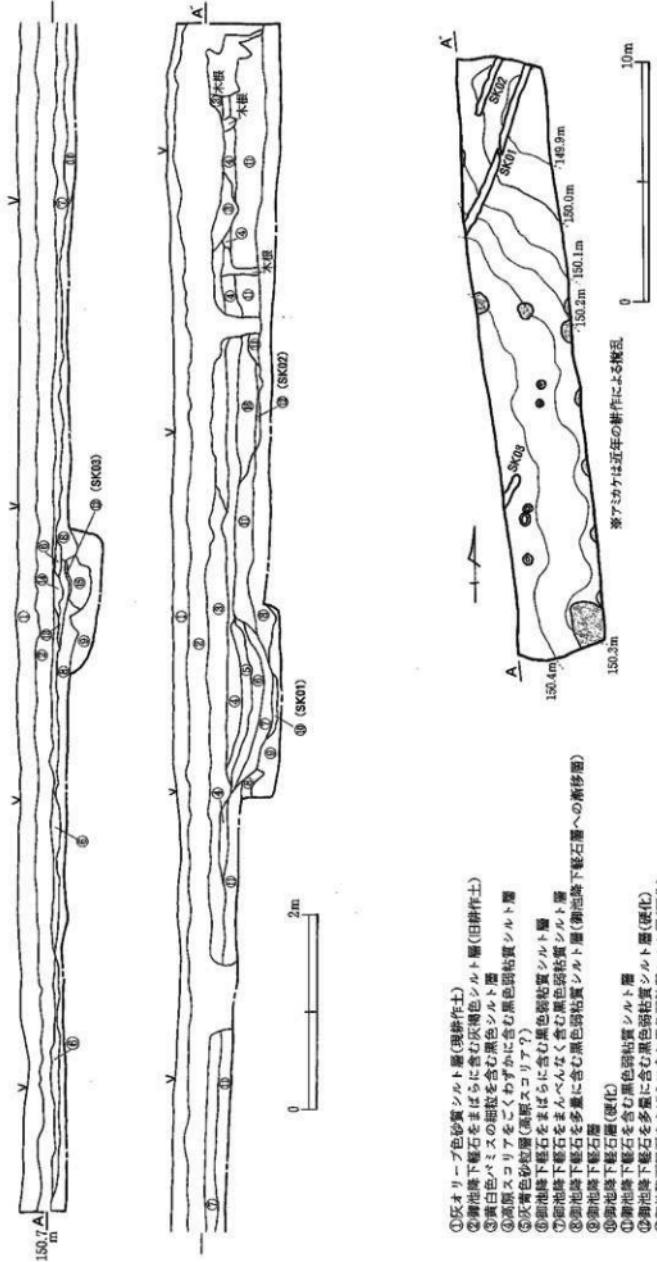
また、A区とC区では黒色土層の上部に高原スコリア(高千穂火山御鉢火口起源、10c～13c頃)ではないかと思われる火山灰を含んでいる。



第2図 基本土層図



第3図 調査区域図 (S=1/5000)



第4図 A区土壤分布図及び土壌断面図

2 A区の調査

A区は遺構検出面となる御池降下軽石層では南から北に傾斜している。B区は北から南に傾斜しているため、かつてはA区とB区の境付近が浅い谷状になっていたと考えられる。遺構検出面は部分的に近現代の耕作による搅乱をうけていたが、おおむね良好に遺存していた。確認できた遺構は道路状遺構3条(SK01~03)とピット5基である。遺物は縄文土器、弥生土器と思われる小片を数点検出したが、図化できるものはなかった。

SK01

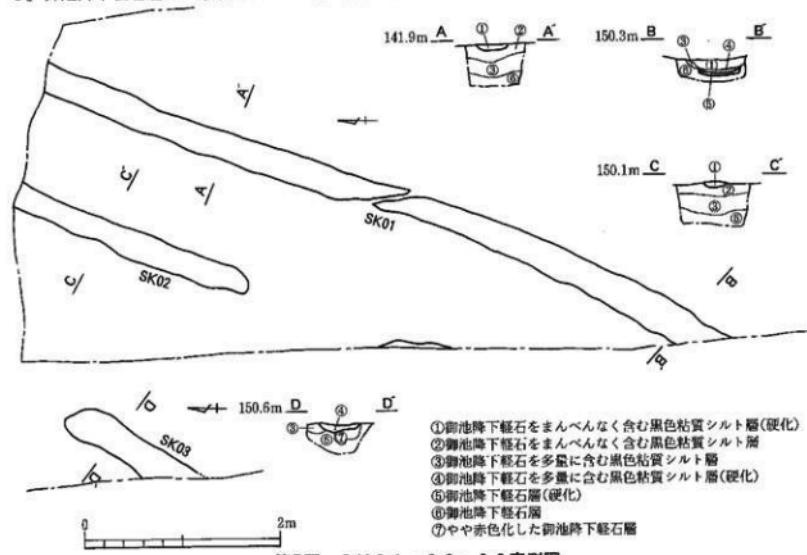
調査区の北側に、一ヶ所搅乱により切られていたが南西から北東方向に走行している道路状遺構で、幅員約40cmである。断面で確認すると(第4図)黒色土中から溝状に掘り込まれた底が硬化していることが確認できる。調査区西側では、御池降下軽石層上面が降下しているのに対して、東側では御池降下軽石層から30cmほど上層の黒色土が硬化している。これはこの硬化面が形成された時期には、前述の谷状地形の黒色土による埋没が進みつつあり、その上にSK01が形成されたと考えられる。共伴する遺物の出土は無いが、調査区断面で確認できるSK01上の埋土の状況は高原スコリア(10c~13c頃降下)ではないかと思われる層が堆積している点など、後述するE区で検出したSD01と酷似している。SD01の埋土からは9世紀頃の土師器片が検出していることから、この道路状遺構の形成時期も9世紀頃ではないかと思われる。

SK02

SK01の北側約1mに、SK01とはほぼ平行に走行する道路状遺構で幅員約30cmである。SK02の埋没後にSK01が作られたのではないかと思われる。

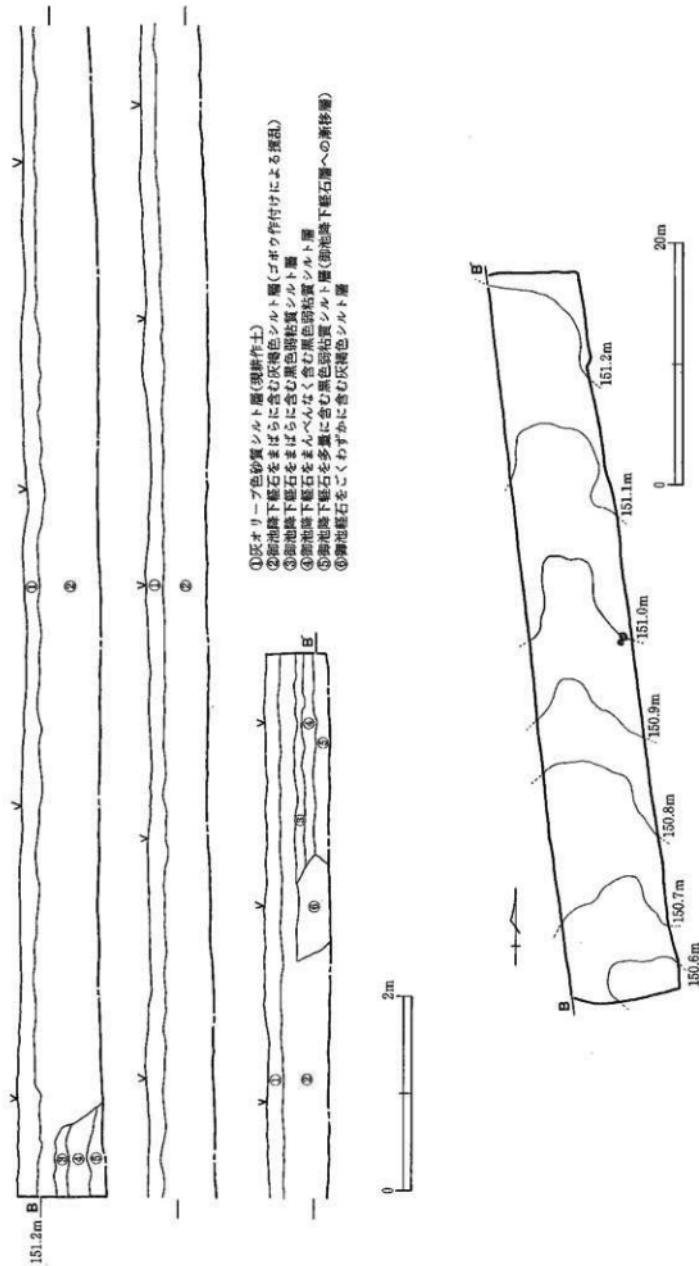
SK03

A区の南側で検出した道路状遺構で幅員約40cmである。走行する方向はSK01、SK02と同じである。御池降下軽石層上に形成されている。時期は不明である。



第5図 SK01・02・03実測図

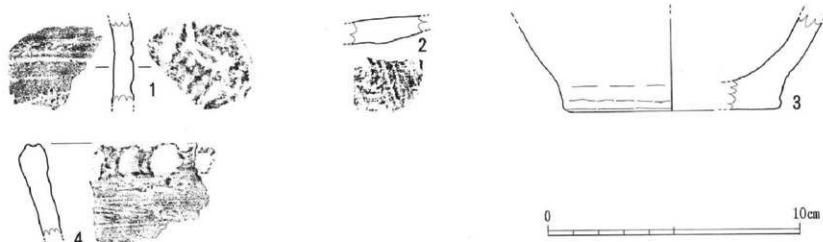
第6図 B区遺構分布図及び土壠断面図



3 B区の調査

B区は遺構検出面では、前述のとおり北から南に緩やかに傾斜している。遺構検出面は、2基のピットを検出できた調査区東側の一部を除くほとんどの部分が、ゴボウ作付けにより破壊されていた。

遺物の検出数は多くはなく、そのほとんどが縄文土器だが、弥生土器の小片もわずかだが検出している。しかし、弥生土器で図化できるものや年代を特定できるものは無かった。



第7図 B区出土遺物実測図

掲載番号	層	種別	器種	部位	調整(内)	調整(外)	胎土	年代	型式等	備考
1	5	縄文土器		胴部	貝殻条痕後ナデ	ナデ	1mm以下 の鉱物を含む	縄文後期		沈線文。沈線内に組織痕が確認できる。施文具を押しつけた際のものか?傾き不明。
2	5	縄文土器	鉢	底部	ナデ		2mm以下 の鉱物を含む	縄文晩期		底部に組織痕有り。
3	一括	縄文土器		底部	ナデ	ナデ	精良	縄文晩期		(反転復元)
4	3	縄文土器		口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ	2mm以下 の鉱物を含む	縄文晩期	夜臼式	口縁部に刻目突帯がめぐる。

表1 B区出土遺物観察表

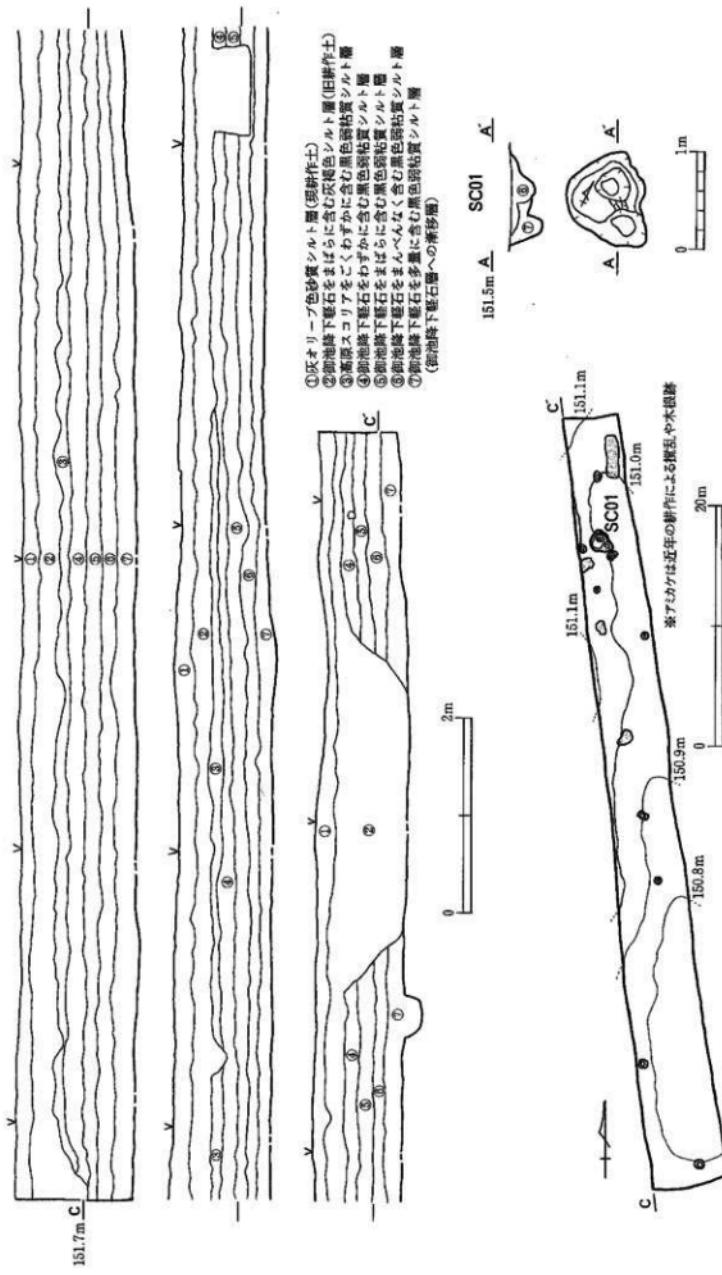
4 C区の調査

C区の遺構検出面は北東部がやや高くなっているが、A区、D区のように目立った傾斜は無い。近現代の耕作による破壊をわずかに受けていたが、ほぼ良好に遺存していた。確認できた遺構は土坑1基とピット9基である。

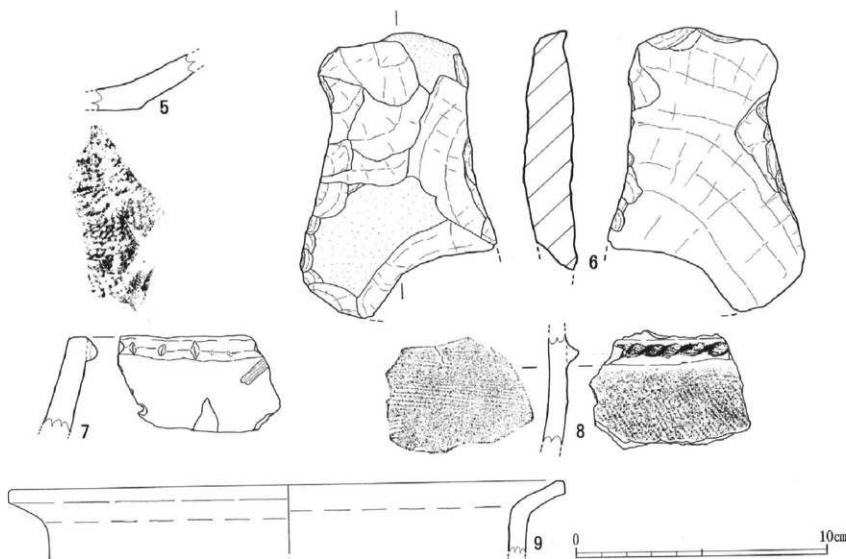
出土遺物は縄文土器、弥生土器の小片がほとんどである。調査区中央やや北よりの黒色土中から土堀具の刃部欠損ではないかと思われる石器(第9図、6)を含む多くの土器が集中して出土し、住居跡・溝状遺構などの存在が疑われたが、調査区断面での確認も含めて遺構は確認できなかった。その他、弥生中期後半頃の中溝式に分類できるのではないかと思われる刻目突帯を持つ弥生土器片(第9図、8)も出土している。

S C O 1

調査区北側で検出した土坑で、平面プランは不定形であえて分類すれば直径1mの楕円形に近い。検出面からの深さは約20cmである。ピット状の2つの落ち込みが確認できる。埋土中からの遺物の出土は無かつたが、埋土の状況から縄文後期から弥生時代頃のものであると思われる。



第8図 C区遺構分布図及び土層断面図、SC01実測図



第9図 C区出土遺物実測図

掲載番号	層	種別	器種	部位	調整(内)	調整(外)	胎土	年代	型式等	備考
5	3	縄文土器	鉢	底部	ナデ	ナデ	1mm以下の礫物を含む	縄文晩期		底部に組織痕有り。
6	3	石器	石斧							土掘具?
7	3	弥生土器		口縁部	ナデ	ナデ	2mm以下の礫物を含む	弥生前期		口縁部に貼付けの刻目突帯がめぐる。突帯下に刺突文が確認できる。外面に工具痕有り。
8	3	弥生土器	甕	胴部	横ハケメ	斜めハケメ	2mm以下の歛物を含む	弥生中期後半	中溝式	刻目突帯がめぐる。刻目内には原体に巻きつけられていたと思われる布状の圧痕が残る。
9	3	弥生土器	甕?	口縁部	横ナデ	横ナデ	2mm以下の歛物を含む	弥生中期		(反転復元)

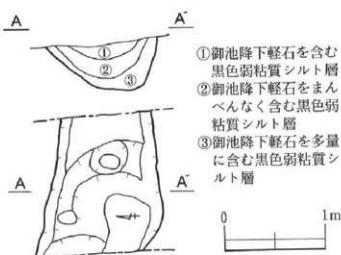
表2 C区出土遺物観察表

5 D区の調査

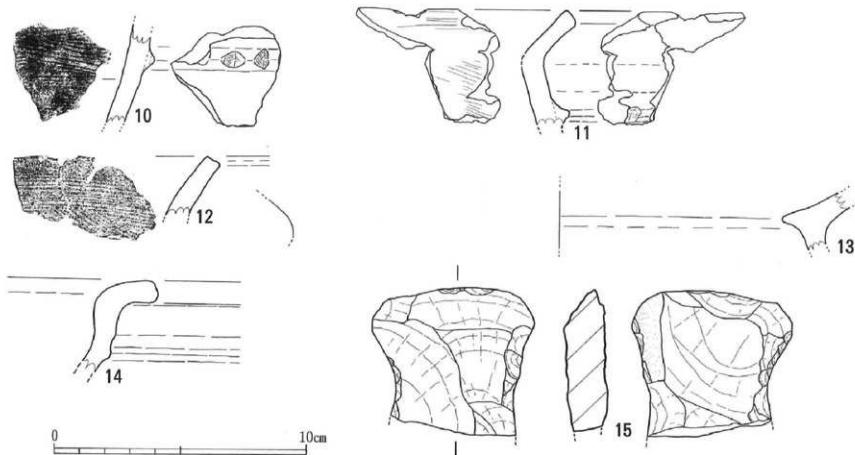
D区は現在の耕作面では北側約3分の1が南側より1mほど高くなっている。遺構検出面でも北側から南側に緩やかに傾斜している。そのため中央部では耕作による削平が御池降下軽石層まで及んでいた。遺物包含層が残っていた南隅と北隅では北隅から弥生土器等の遺物の出土が多くかった他、土掘具の一部ではないかと思われる石器(第11図、15)も出土した。

S C 0 8

調査区北側で検出した。調査区を横断していたため全容は不明である。土坑と分類したが溝状遺構の一部である可能性もある。埋土中から遺物の出土は無かった。



第10図 S C 0 8 実測図



第11図 D区出土遺物実測図

掲載番号	層	種別	器種	部位	調整(内)	調整(外)	胎 土	年 代	型式等	備 考
10	3	弥生土器	甕?	胴部	横ハケメ	横ナデ	2mm以下の鉱物を含む	弥生前期		刻目突帯がめぐる。
11	3	弥生土器	甕	口縁部	横ハケメ	ナデ	2mm以下の鉱物を含む	弥生中期後半	中溝式	刻目突帯がめぐる。外面剥落。
12	3	弥生土器	甕	口縁部	横ハケメ	横ナデ	3mm以下の鉱物を含む	弥生中期後半		中溝式と同時期。
13	3	弥生土器	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	2mm以下の鉱物を含む	弥生中期	黒髮式?	口縁部が欠けているため確証は無いが、恐らく黒髮式と思われる。
14	3	陶磁器	甕	口縁部	施釉	施釉		近世		18c 代系薩摩焼。重ね焼きの目跡(貝目)有り。口縁部内面は無釉。
15	3	石器	石斧?							土掘具の刃部欠損か?

表3 D区出土遺物観察表

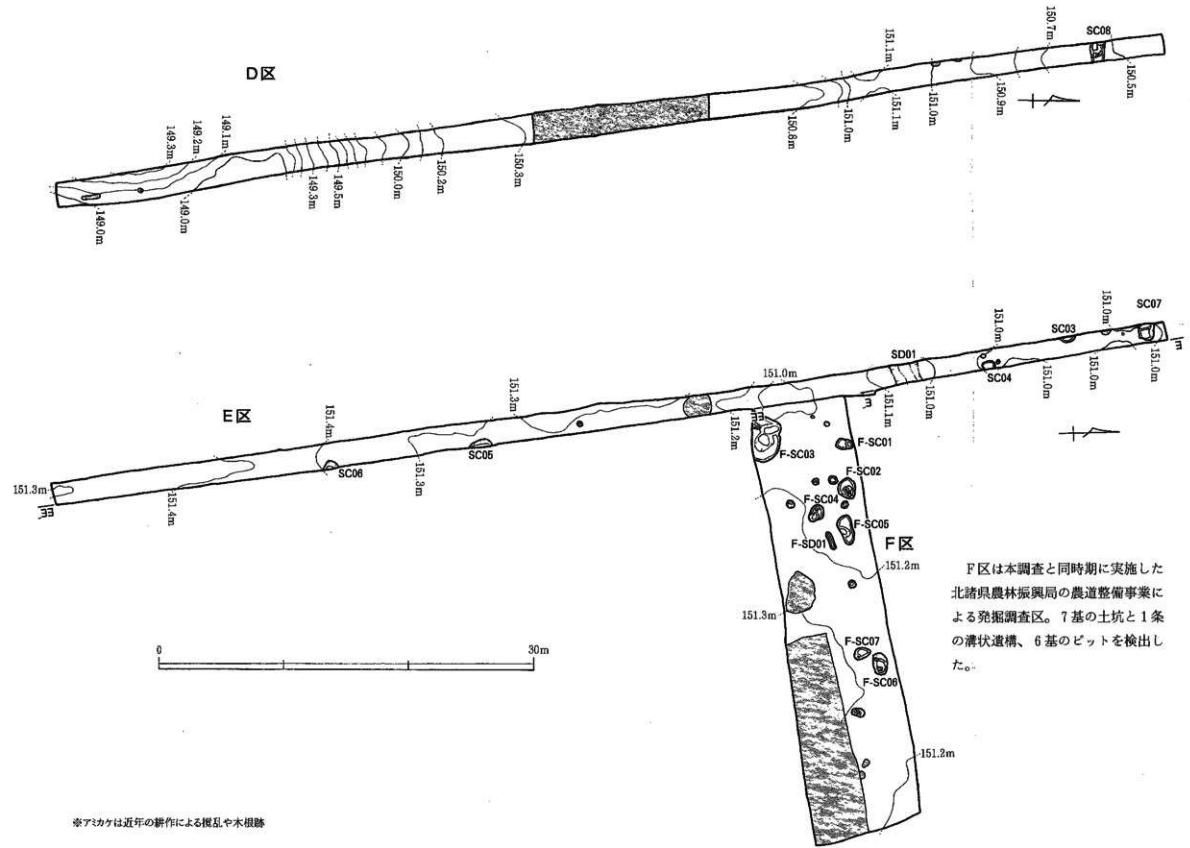
6 E区の調査

E区は長さおよそ90m、幅2.5mとD区同様南北に細長い調査区である。遺構検出面はD区とは違って南北方向に傾斜してはいない。東側でF区(農道整備事業に伴う発掘調査区)と接しているが、そのF区との接点より南側は耕作による搅乱が遺構検出面まで及んでいた。ただしB区のように全面は破壊されておらず、遺構の確認はかろうじてできた。確認できた遺構は断面上でのみ確認できた土坑(SC02)を含む6基の土坑(SC02~07)と1条の溝状遺構(SD01)、ピット3基である。

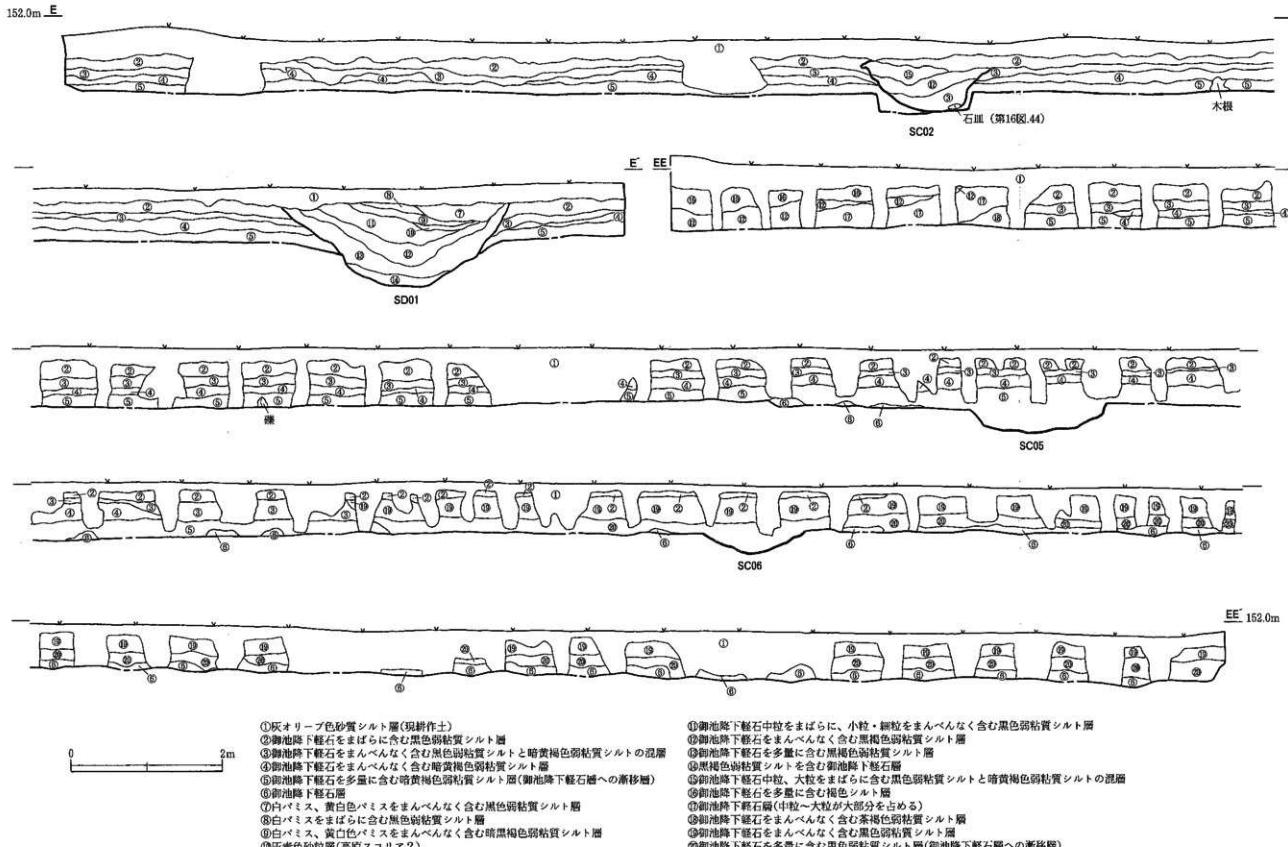
出土遺物は縄文・弥生土器が中心で縄文後期の指宿式(第15図、16~22)や市来式(第15図、23~29)に分類できると思われる土器片も出土した。その他に刻目突帯のめぐる弥生時代前期の土器片(第16図、36・37)も出土した。

SC02

北側の調査区断面(第13図)でのみ確認できた。平面プランは不明であるが、床面近くから表面に敲打痕のある石皿(第16図、44)や小片のため図化できなかったが縄文後期の土器片等が出土している。



第12図 D区・E区・F区遺構分布図



第13図 E区土層断面図

S C 0 3

調査区北側、西隅で確認した土坑である。全容は不明だが、平面プランは円形、もしくは梢円形と思われる。埋土から遺物の出土は無かった。

S C 0 4

調査区北側、東隅で確認した土坑で、全容は不明だが平面プランは長軸約90cm、短軸約80cmほどの梢円形プランと思われる。埋土から縄文後期の土器片が出土したが小片のため図化できなかった。

S C 0 5

調査区南側、東隅で検出した土坑で、平面プランは不明である。埋土から縄文後期の土器片が出土したが小片のため図化できなかった。

S C 0 6

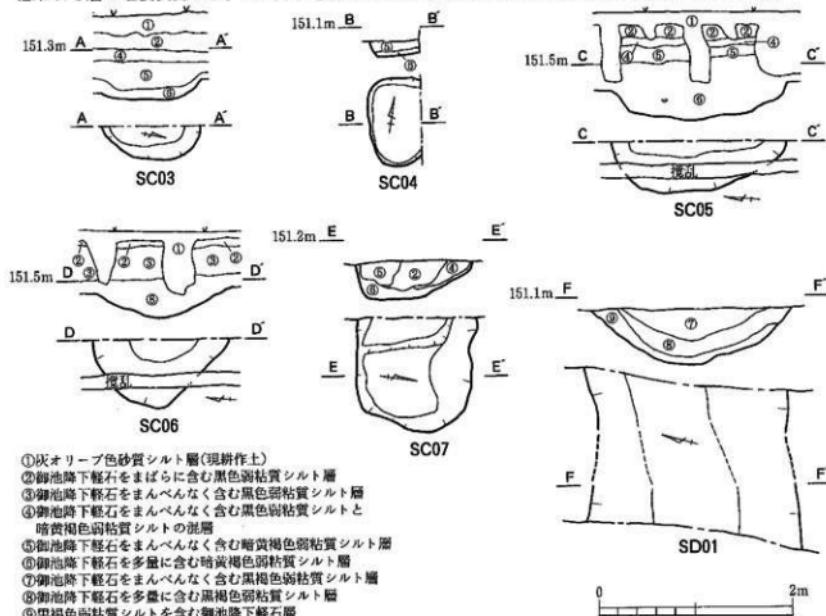
調査区の最も南側で確認した土坑で、平面プランは不明である。埋土中から遺物の出土は無く、時期は不明である。

S C 0 7

調査区の最も北側で検出した。土坑に分類したが、溝状遺構の一部である可能性もある。埋土中から遺物の出土は無いが、E区北側で黒色土の埋土を持つことから縄文晚期以降のものと思われる。

S D 0 1

調査区北側で検出した溝幅約2m、検出面からの深さ約60cmの東西方向に走行する溝状遺構である。埋土中から、9世紀頃のものと思われる土師器片(第16図、40・41)が出土した。高原スコリアではないかと思われる層の堆積状況から、その降下時期の10世紀～13世紀には、ほぼ埋没していたと考えられる。



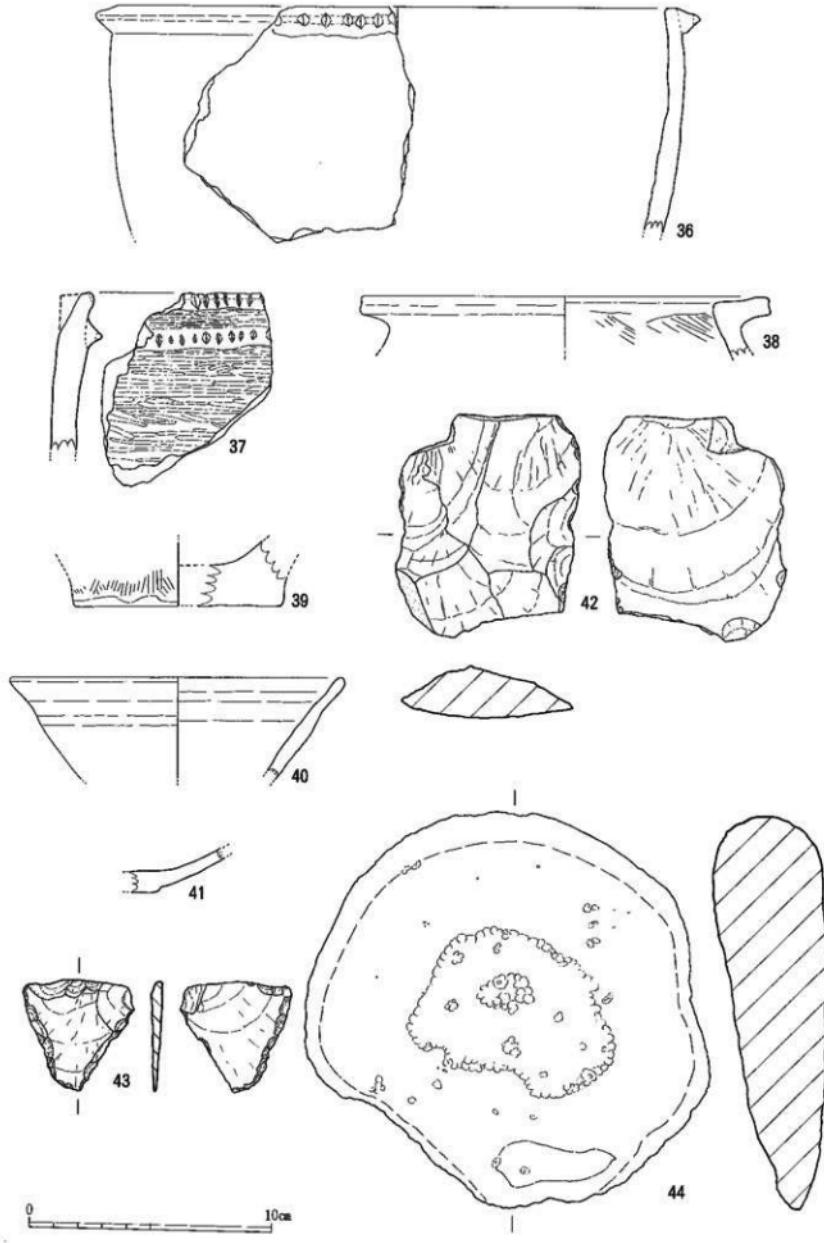
第14図 S C 0 3・0 4・0 5・0 6・0 7、S D 0 1実測図



第15図 E区出土遺物実測図（縄文）

掲載番号	層	種別	器種	部位	調整(内)	調整(外)	胎土	年代	型式等	備考
16	4	縄文土器		口縁部	ミガキ?	ナデ	2mm以下の鉱物を含む	縄文後期	指宿式	沈線文。口縁部に刻目有り。内面は粗いミガキにより調整されている。
17	3	縄文土器		胴部	ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期	指宿式	沈線文。傾き不明。
18	4	縄文土器		胴部	ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期	指宿式	沈線文。傾き不明。
19	3	縄文土器		胴部	貝殻条痕後ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期	指宿式	沈線文。傾き不明。
20	4	縄文土器		胴部	貝殻条痕後ナデ	ナデ	2mm以下の鉱物を含む	縄文後期	指宿式	沈線文。内面は磨耗している。傾き不明。
21	5	縄文土器		胴部	ナデ	ナデ	2mm以下の鉱物を含む	縄文後期	指宿式	沈線文。傾き不明。
22	3	縄文土器		口縁部	ナデ	ナデ	3mm以下の鉱物を含む	縄文後期	指宿式?	内外面磨耗。口縁部に刻目有り。
23	5	縄文土器		口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	精良	縄文後期中葉	市来式	口縁部に刺突文と沈線文。
24	4	縄文土器		口縁部	貝殻条痕	ハケメ?	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期中葉	市来式	口縁部に沈線文。
25	5	縄文土器		口縁部	ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期中葉	市来式	波状口縁。刺突文。
26	3	縄文土器		口縁部	ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期中葉	市来式	刺突文と沈線文。
27	5	縄文土器		口縁部	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	精良	縄文後期中葉	市来式	波状口縁。口縁部に刺突文と沈線文。
28	4	縄文土器		口縁部	ナデ	ナデ	3mm以下の鉱物を含む	縄文後期中葉	市来式	刺突文。内面磨耗。波状口縁か?
29	5	縄文土器		口縁部	貝殻条痕	上部ナデ下部貝殻条痕	2mm以下の鉱物を含む	縄文後期中葉	市来式	波状口縁。口縁部に刺突文と沈線文。口縁部の文様帶が圓いことから、市来式でも古い時期と考えられる。
30	5	縄文土器		底部	ナデ	ナデ	3mm以下の鉱物を含む	縄文後期		外面に指頭痕有り。(反転復元)
31	4	縄文土器		底部	ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期		外面に指頭痕有り。内面に工具痕有り。(反転復元)
32	5	縄文土器		底部	ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文後期		底部に組織痕明瞭。外面に工具痕有り。(反転復元)
33	5	縄文土器		底部	ナデ	ナデ	2mm以下の鉱物を含む	縄文後期末		内面磨耗。(反転復元)
34	4	縄文土器		底部	ナデ	ナデ	1mm以下の鉱物を含む	縄文晚期		外面に指頭痕有り。(反転復元)
35	4	縄文土器		口縁部	ナデ	ナデ	2mm以下の鉱物を含む	縄文初期?		外面にスス付着。

表4 E区出土遺物観察表(縄文)



第16図 E区出土遺物変測図（弥生・平安・石器）

掲載番号	層	種別	器種	部位	調整(内)	調整(外)	胎土	年代	型式等	備考
36	一括	弥生土器	壺	口縁部	ナデ	ナデ	4mm以下 の鉢物を 含む	弥生前期		E区南側の廃土置き場掘り下げ時に出土。口縁部に貼付けの割目突帯がめぐる。(反転復元)
37	一括	弥生土器	壺	口縁部	ナデ	ミガキ	3mm以下 の鉢物を 含む	弥生前期		E区南側の廃土置き場掘り下げ時に出土。口縁部とその下に貼付けの割目突帯がめぐる。口縁部内面剥落。
38	5	弥生土器	無柄壺	口縁部	口縁部横ナデ 肩部斜めハケナ	横ナデ	1mm以下 の鉢物を 含む	弥生中期		(反転復元)
39	一括	弥生土器		底部	ナデ	ハケメ	7mm以下 の鉢物を 含む	弥生		E区南側の廃土置き場掘り下げ時に出土。(反転復元)
40	3	土師器	輪?	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	精良	平安		SD01より出土。9c頃(反転復元)
41	3	土師器		底部	ナデ	ナデ	精良	平安		SD01より出土。9c頃
42	5	石器	剥片							
43	4	石器	剥片							
44	4	石器	石皿							SC02より出土。表面に敲打痕有り。

表5 E区出土遺物観察表(弥生・平安・石器)

<参考文献>

都城市史編さん委員会『都城市史 通史編 自然・原始・古代』都城市 1997年

宮崎県『宮崎県史 通史編 原始・古代1』宮崎県 1997年

株式会社古環境研究所『自然科学分析調査報告書 都城市 伊勢谷第1遺跡』1998年

宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書第15集』1970年

宮崎県教育委員会『山ノ田第1遺跡』1996年

宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書第40集』1997年

都城市教育委員会『都城市文化財調査報告書第17集 屏風谷第1遺跡』1992年

都城市教育委員会『都城市文化財調査報告書第28集 黒土遺跡』1994年

都城市教育委員会『都城市文化財調査報告書第37集 大浦遺跡』1997年

都城市教育委員会『都城市文化財調査報告書第67集 築池遺跡(第1~4次発掘調査)』

十三東第2遺跡(第2次発掘調査)』2004年

第4章 おわりに

当地域で現在確認されている最も古い人の生活の痕跡は、縄文時代早期、約7000年前に霧島火山から噴出した霧島蒲牟田スコリアの下から確認されている。松ヶ迫遺跡では炉穴、十三束第2遺跡の第1次調査では落し穴の跡が、土器や石器、集石遺構とともに見つかっている(各遺跡の位置は第1図参照)。これらは褐色土中に掘り込みを持つ遺構で、その土の状況からこれらの遺構が作られた当時は、その地は森林であったと考えられる。また、距離的にはやや離れるが、屏風谷第1遺跡の第1次調査では、同じく霧島蒲牟田スコリアの下から縄文早期の押型文土器などが見つかっている。この地域は霧島蒲牟田スコリアの降下後も約6300年前の鬼界アヤホヤ火山灰や、約4200年前の霧島御池降下軽石の降下等、たびたび大規模な火山災害に襲われている。

御池軽石の降下後しばらくすると、この地には再び森が形成され、その南限は十三束第2遺跡第2次調査のE区の中央付近であることが土層の堆積から推測される。これらの森の恵みを求めて人々の生活は再開され、やがて森林伐採や火入れ(焼き払い)などの植生干渉が行われるようになる。しかし、十三束第2遺跡の第2次調査では特に顕著だが、縄文時代後期の遺物は数多く出土するものの縄文時代晚期(約3000年前)から弥生時代にかけての遺構・遺物は少ない。また、築池遺跡では東側の第2次調査区で、縄文後期末から晩期初頭の住居跡1基と、弥生時代後期後半の住居跡3基が検出された以外は、弥生時代の遺構は検出されていない。その他住居跡としては、屏風谷第1遺跡の第2次調査で古墳時代初頭の竪穴住居跡1基が検出されている。

この地域では御池降下軽石の堆積が2m～3mにも及び、発掘調査の原因となる工事等による影響の少ない御池降下軽石層下(縄文時代中期以前の遺物包含層)の調査を面的に実施したのは、屏風谷第1遺跡の第1次調査、松ヶ迫遺跡の調査、十三束第2遺跡の第1次調査のみである。また、御池降下軽石層上は近年の耕作等による削平を受け、失われている可能性が高いことも考慮しなくてはならないが、周辺遺跡の調査で得られた情報も含めて、当地域の生活の変遷を概観すると次のようになる。

縄文時代早期から後期にかけて、生活の基盤となるものは主に山のもたらす恵みであった。狩りによる獲物は、森の近くで食用に加工され、また土器による煮沸によりアツ抜きが可能となり、これまで食用には適さなかった木の実も食べられるようになった。その後、縄文時代後期末から弥生時代の初めには、より川の近くへと生活域が移っている。これはこの時期に都城盆地に伝わった稻作と無関係ではないと思われる。稻作はそれ以前に比べてはるかに安定した食料の供給をもたらすが、より組織化された労働力を必要とした。それらはやがて社会における役割分担と権力者を生み出す。高塚古墳や豊富な副葬品を持つ地下式横穴墓群などは、祭祀儀礼等を行う社会集団と権力者の存在を窺わせるものである。

最後に調査及び報告書の作成にあたり、ご指導・ご教示して頂いた、矢部喜多夫・柴畠光博・米澤英昭・栗山葉子各氏に、心からの感謝の意を表します。



調査区全景（写真上が西）



A区 SK01土層断面（東から）



B区 土層断面（東から）



C区 土層断面（東から）



E区 土層断面（西から）

図版 2



A区 重機による表土剥ぎと廃土の運搬



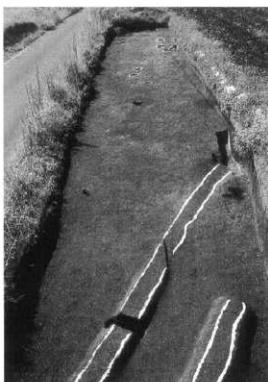
E区 作業員による包含層の掘り下げ



A区 SK01・02検出(北から)



A区 SK03検出(北東から)



A区 完掘(北から)



B区 完掘(北から)



B区 遺構(ピット)検出(北から)



B区 遺構(ピット)完掘



C区 遺物出土状況(北から)



C区 遺構検出(北から)



C区 完掘(北から)



C区 SC01半サイ(東から)



C区 SC01完掘(東から)



D区 南側完掘(北から)



D区 北側遺物出土状況(北から)



D区 北側遺構検出(北から)

図版 4



D区 SC 08完掘（北から）



E区 北側遺構検出（南から）



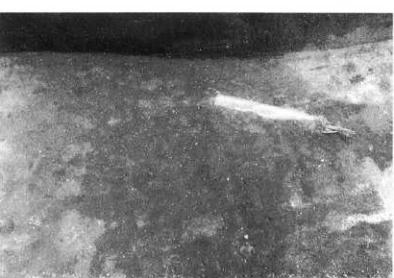
E区 北側完掘（南から）



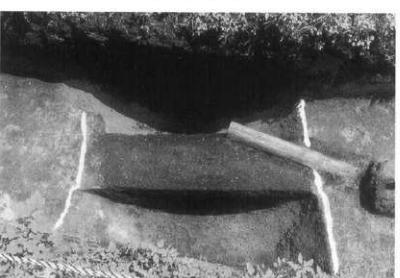
E区 南側遺構検出面の状況（南から）



E区 南側完掘（北から）



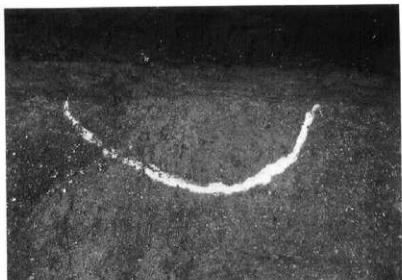
E区 SD 01検出（西から）



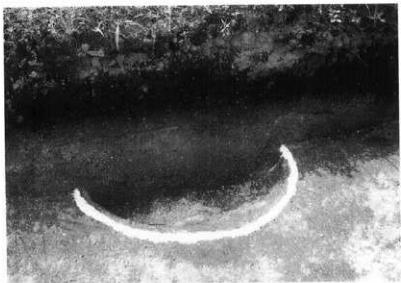
E区 SD 01完掘（西から）



E区 SD 01土層断面（西から）



E区 SC03検出（東から）



E区 SC03完掘（東から）



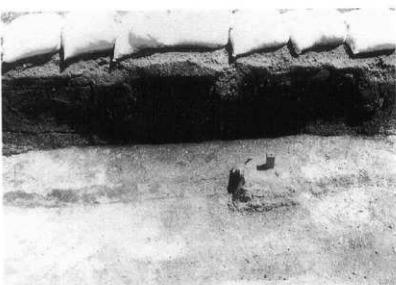
E区 SC04検出（西から）



E区 SC04完掘（西から）



E区 SC05完掘（西から）



E区 SC06検出（西から）

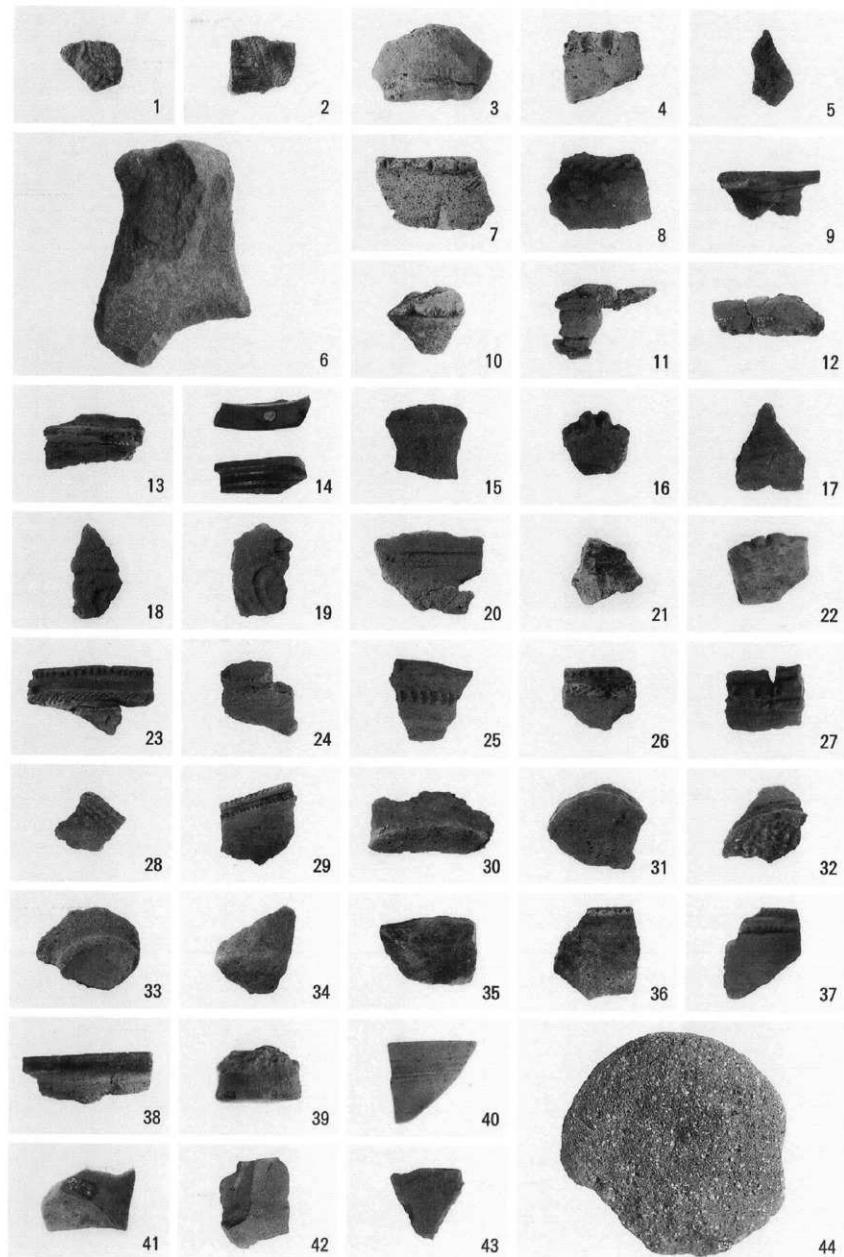


E区 SC06完掘（西から）



E区 SC07完掘（東から）

図版 6



ちくいけ
築池遺跡(第5地点)

1 調査の経緯

築池遺跡は、都城市の北部下水流町に位置し、築池地下式横穴墓群を含め呼称している。遺跡の主体は地下式横穴墓であるが、縄文時代後期末や弥生時代後期の竪穴住居跡等が出土し、集落遺跡として位置付けもなされている。

調査の経緯は、都城市土木課による緊急地方道路市道下水流17号線改良工事の事業照会を受け、平成14年9月に事業予定区域において、試掘調査及び地下レーダー探査を行い該地における遺跡の分布と種別の把握に努めた。結果、試掘では遺物包含層は明瞭に遺存していることが確認できたが、試掘トレンチ数の少なさも起因してか主体となる地下式横穴墓の確認には至らなかった。一方、地下レーダー探査では該地において最大40基前後の存在を想定する解析結果となった。これらの状況から地下式横穴墓の分布が想定されるため、原因調査と協議後、平成15年度に本調査を実施することになった。同遺跡内の所謂面的調査は5地点目となり、過去の調査事例との混乱を避けるため今回の調査名を築池遺跡第5地点とした。調査期間は平成15年7月16日から10月31日である。

2 調査の内容

調査は梅雨の影響を受け、予定より遅れ7月の開始となった。

調査区間はおよそ10m×250mほどで、調査の便宜上県道から最初の農道四つ角までをI工区、残りをII工区とした。遺跡の基本層序は、第1層灰黒色土(耕作土)・第2層黒色土(遺物包含層)・第3層硬質黒褐色土(漸移層)・第4層御池ボラである。遺構検出面は第2層下部である。

< I 工区 >

調査区間は県道より約140mほどであるが、家屋や塀の影響で県道から50mほどは調査できず、残り90mほどを農道に接する農地への進入路を確保するため4ブロックに分けて調査した。地下レーダーの解析では未調査部分を差し引いて15地点で反応があり、そのうち5地点で遺存状態が良好であるとの結果がでていた。また、北壁土層図(東西方向)でわかるように調査区域中央付近でゴボウ植機のトレッシャーにより土層の乱れはあるものの全体的には第2層以下明瞭に堆積している。しかし、南北方向では南側に向かい傾斜し、谷状の地形となっている。調査方法はアスファルトおよび第1層を重機により除去後、人力により第2層を掘下げた。地下式横穴墓の竪坑付近が存在すれば、御池ボラ層内に竪坑・玄室部分を構築した際に生じるボラの残土が地下レーダーで存在するであろうポイントにまったくなかった。結果、I工区において地下式横穴墓の出土はなかった。



第1図 調査位置図

遺構

1号土坑(SC01)

I工区西側、北壁調査区外へと広がる。遺構の全容は把握していない。平面プランは方形状を呈すと思われ、西南部分に方形の浅い落込みを伴いそのなかにピットをもつ。ピット検出面付近で炭小片が出土している。

遺物

1～5は土器片で弥生ないし古墳時代と思われる。5は底径7.2cmを測る。6は須恵器片で内外面とも磨耗が激しく、器種不明である。7は中世の土師器片。8は16世紀代の青花皿。9は15～16世紀の青磁碗。10、11は近世以降の陶器片である。12は小型の磨石。13は砥石片である。

< II工区 >

農道四つ角から90mほどである。

II工区において、地下レーダーに反応した地下式横穴墓と思われる数は18ヶ所だが、可能性が最も高く遺構の遺存状態のよいものは同工区においてはない。I工区の調査内容から判断すると、地下レーダーのデータを過剰に反映させた可能性が高いことから、II工区においては現農道北側際に長いトレンチを設定し、遺跡の有無を視認することにした。第2層以下良好に堆積している状況をみせたが、遺構は第2層黒色土埋土のピットが1つで出土遺物もごく少なく、第2層中で粗い御池ボラの広がり等もまったくなかった。このような状況からII工区においては、地下式横穴墓や古墳時代以外の遺跡が分布している可能性は極めて低く、これ以上の成果が得られないと判断し調査を終了した。

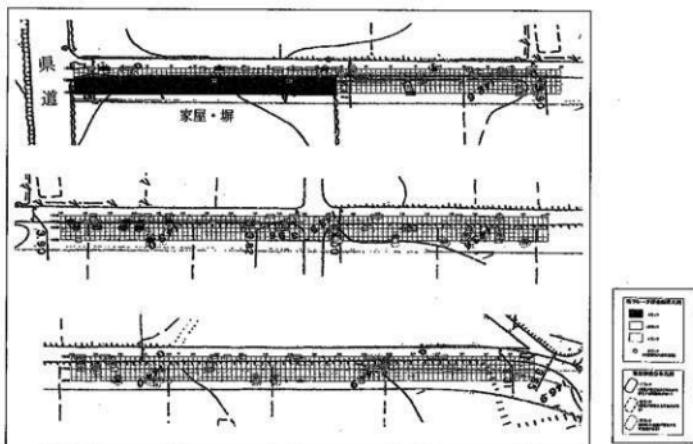
遺構

1号ピット(P-1)

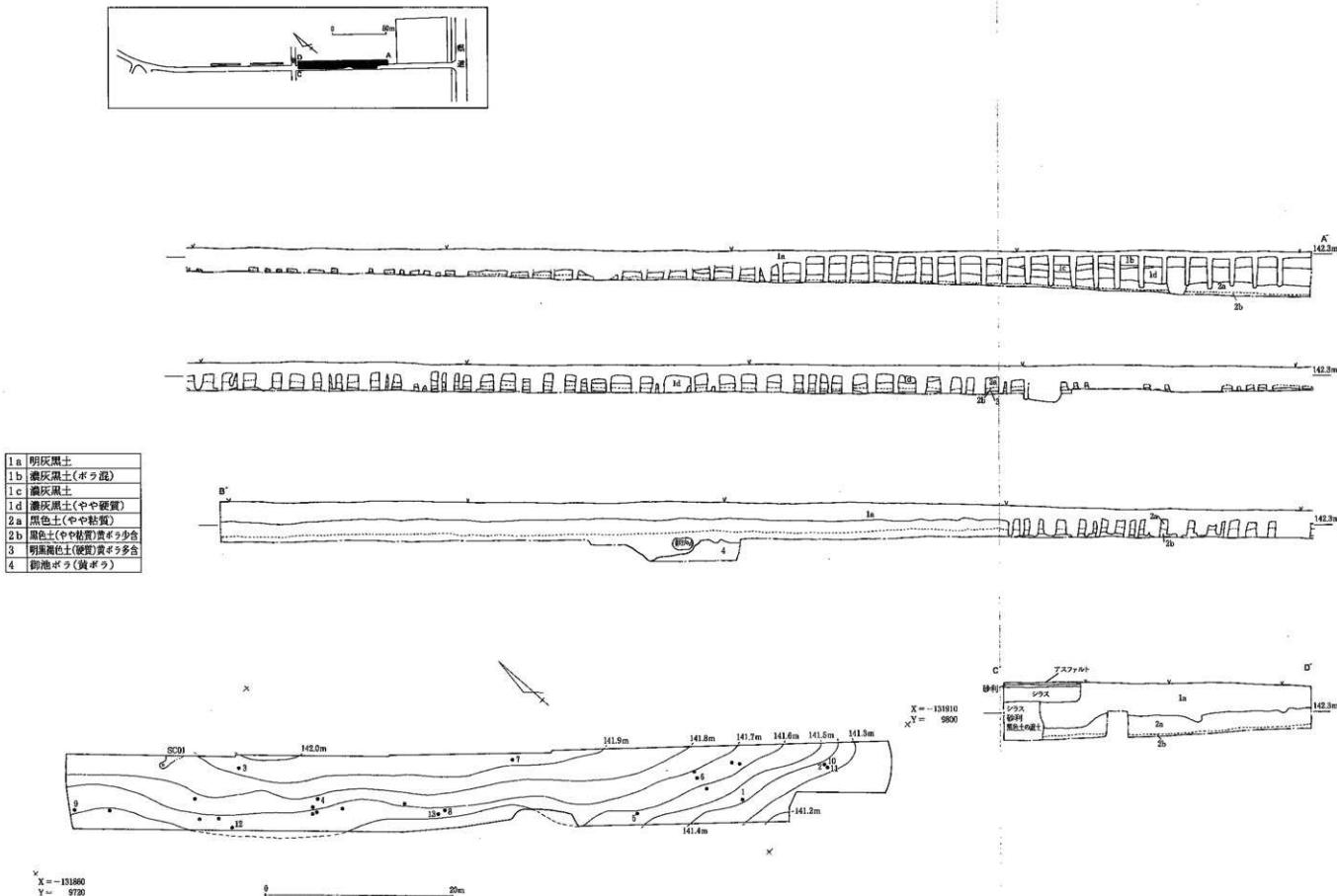
東側トレンチの西側北壁際で出土。径0.25m、深さ0.3m弱で埋土は第2層黒色土でわりとしっかりしている。

遺物

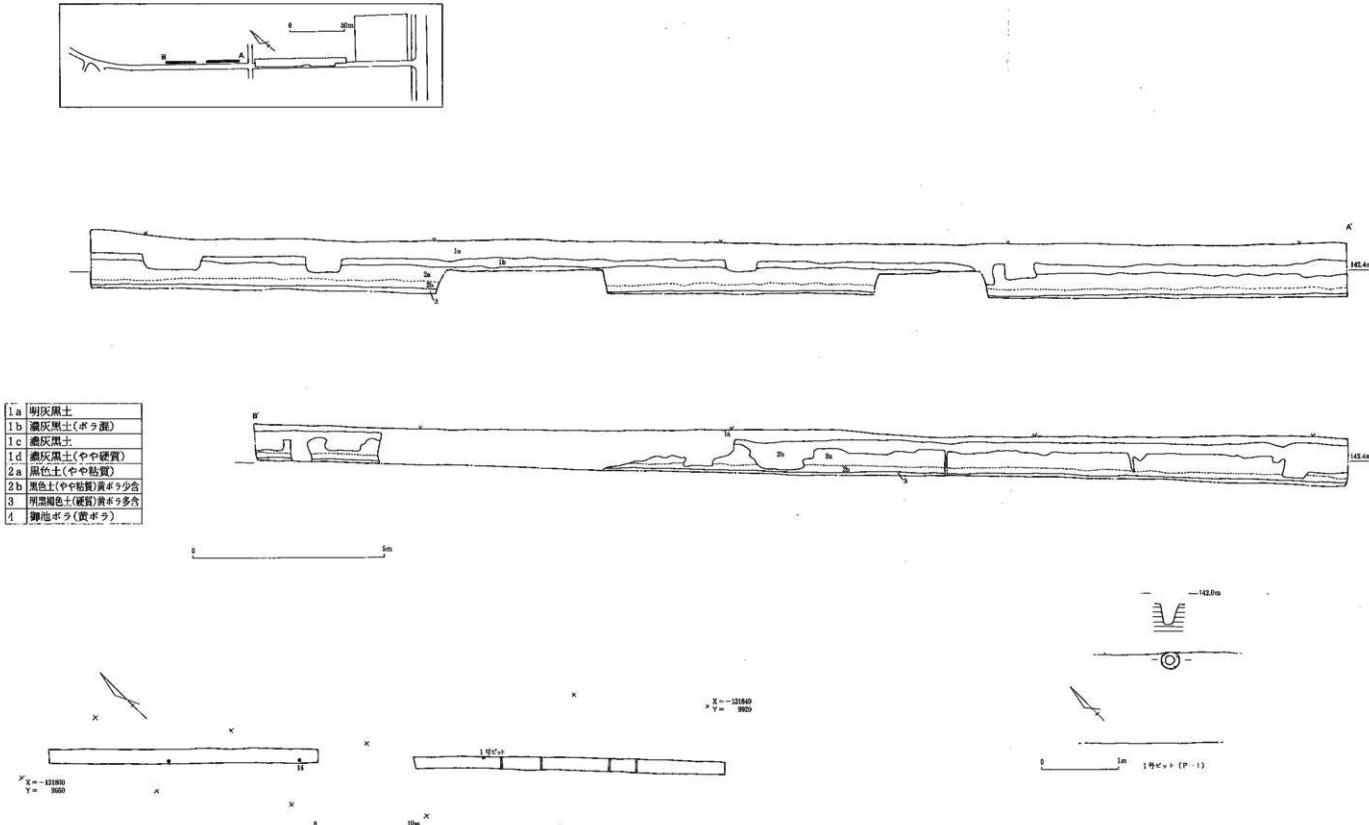
14は須恵器片で、外部に格子目タタキ内面に当て具痕がある。



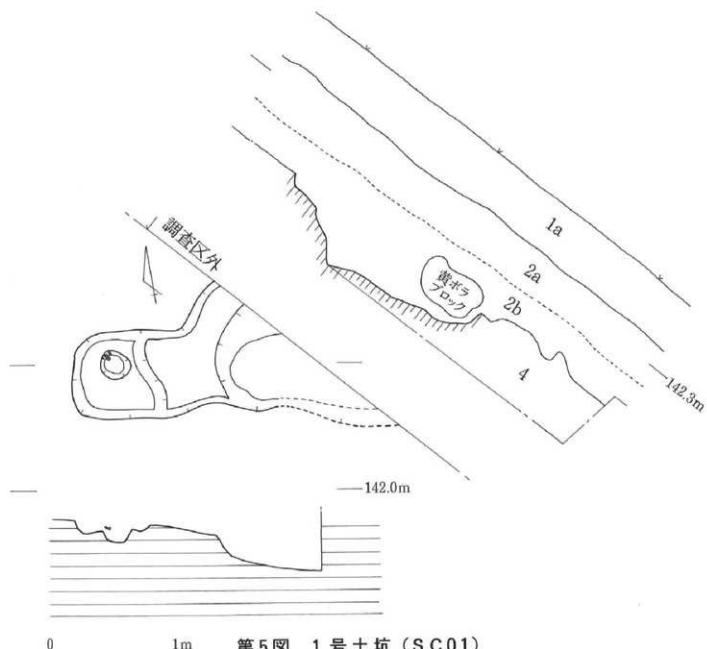
第2図 地下レーダー反応図



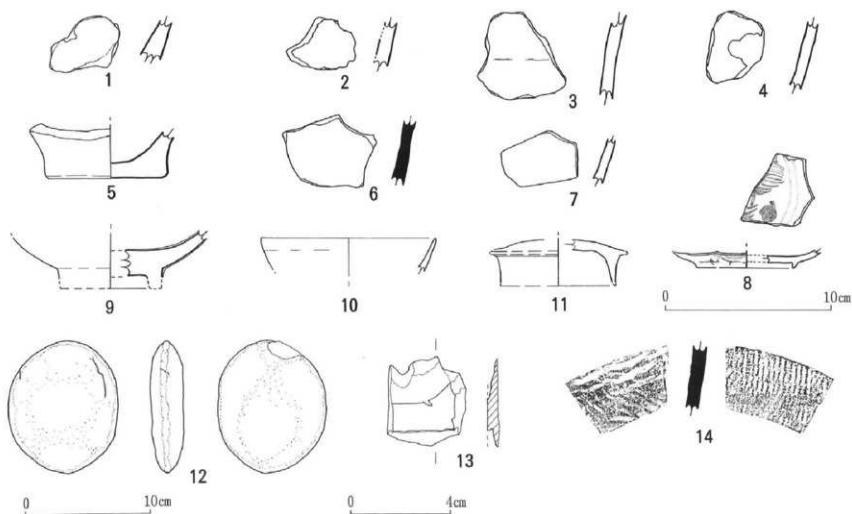
第3図 I工区



第4図 II工区



第5図 1号土坑 (SC01)



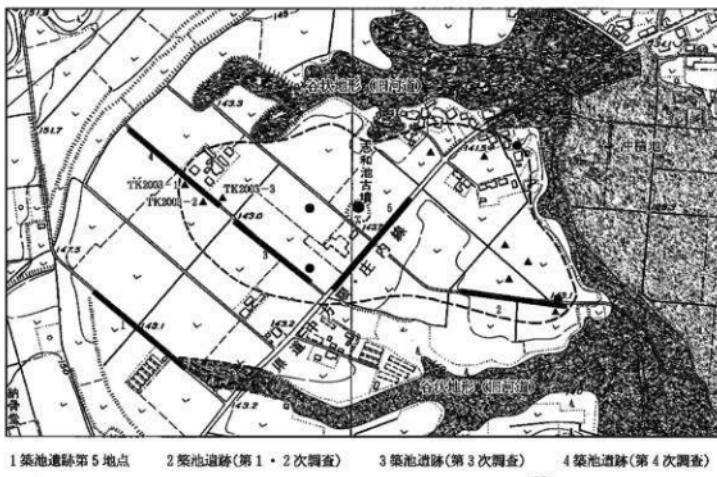
第6図 出土遺物実測図

3 まとめ

築池地下式横穴墓群を含めた築池遺跡は水田面(冲積地)より一段高い標高140m前後の台地上に大きく広がりをみせると思定していたが、今回の発掘調査により同台地の南側および西側部分では遺跡の密度がかなり低いことがわかり、築池遺跡特に築池地下式横穴墓の分布範囲を明確にさせる資料(調査)となった。具体的に述べると、築池地下式横穴墓の分布は県指定志和池古墳群の1～7号墳を内在しながら、遺跡の南北方向でみられる等高線140m以下の谷状の落込み(旧河川)に挟まれ、現時点で発見調査された地下式横穴墓の分布状況を考慮すると、県指定志和池5号墳を東端とする東西方向450m、南北方向200mほどの範囲の中に築池地下式横穴墓は分布していると推定される。また、地下式横穴墓の分布を細かくみると遺跡西側で分布しているTK2003-1, 2, 3号の築造時期が6世紀後半から7世紀前半ほどにおさまり、県道を挟んだ中央から西へ広がっていったことが推定される。

参考文献

『築池遺跡(第1～4次)発掘調査 十三束第2遺跡(第2次発掘調査) 都城市文化財調査報告書第62集 都城市教育委員会 2004.3



1 築池遺跡第5地点 2 築池遺跡(第1・2次調査) 3 築池遺跡(第3次調査) 4 築池遺跡(第4次調査)

5 築池遺跡(1992, 1993年) ●県指定志和池古墳 ▲主な地下式横穴墓山土地点 (○) 築池地下式横穴墓域(推定)

第7図 築池遺跡



築池遺跡第5地点全景（西より）



I工区(東-1) 完掘状況



I工区(東-1) 北壁



I工区(東-1) 遺物出土状況



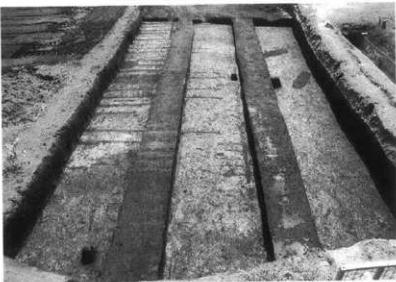
I工区(東-2) 完掘状況(西より)



I工区(東-2) 御池ボラ掘下げ状況



I工区(東-2) 北壁



I工区(東-3) 完掘状況

写真図版 2



I工区(東-4) 完掘状況(東より)



I工区(東-4) 西壁



I工区(東-4) 北壁



I工区(東-4) 1号土坑



I工区(東-4) 1号土坑内炭出土状況



I工区(東-4) 遺物出土状況



I工区(東-4) 遺物出土状況



II工区 調査風景



II工区 東側トレンチ（東より）



II工区 西側トレンチ（西より）



II工区 ピット完掘（東側トレンチ）



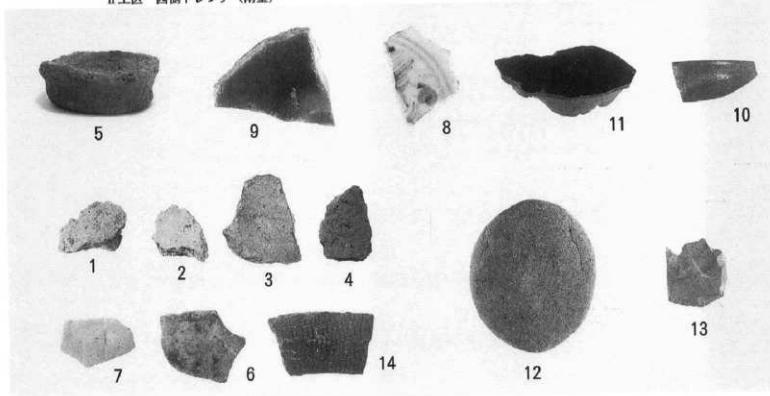
II工区 ピット検出（東側トレンチ）



II工区 西側トレンチ（南壁）



II工区 西側トレンチ（南壁）



報告書抄録

フリガナ	ジュウサンヅカダイニイセキ(ダイニジチョウサ) チクイケイセキ(ダイゴチテン)					
書名	十三東第2遺跡(第2次調査) 築池遺跡(第5地点)					
副書名						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第69集					
編集者名	久松亮 矢部喜多夫					
発行機関	都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	2005年3月					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
十三東第2遺跡	宮崎県都城市上水流町2463-1 番地ほか	31° 49' 12" 付近	131° 5' 55" 付近	2003年 6月10日 ~ 9月21日	約1,100m ²	市道改良工事
築池遺跡 第5地点	宮崎県都城市下水流町2455-7 番地ほか	31° 48' 36" 付近	131° 6' 10" 付近	2003年 7月16日 ~ 10月31日	約1,000m ²	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
十三東第2遺跡	散布地	縄文後期・晚期、 弥生、古代	土坑 溝状遺構 道路状遺構	縄文土器 弥生土器 土師器 石器		
築池遺跡 第5地点	散布地	古墳、中世	土坑	土器、石器、陶磁器		

都城市文化財調査報告書第69集

十三東第2遺跡(第2次調査) 築池遺跡(第5地点)

2005年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会

発行 〒885-8555 宮崎県都城市姫城町6街区21号
TEL(0986)23-9547 FAX(0986)23-9549

印刷 御文昌堂
宮崎県都城市東町18街区1号
TEL(0986)22-1121